

■発行／南方熊楠顕彰会

〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地 TEL0739-26-9909 FAX0739-26-9913
https://www.minakata.org/ (E-mail) minakata@mb.aikis.or.jp

自筆資料に見る南方熊楠…………… 30

「虎」腹稿の修復

文／（公財）元興寺文化財研究所 金山正子

寅年生まれということで、2022年始にかけての展示と講演を仰せつかったが、とりたてて熊楠自筆資料に関するネタがあるわけではない。私は紙資料を中心とした文化財の修復を生業としているが、実を言うと、資料解釈などが依頼の範疇にない場合は、修復している資料の内容には極力関心を向けまいと心掛けている。というのは、つい読んでしまうと気が付くと夕方…肝心の修復作業が滞ってしまうからである。

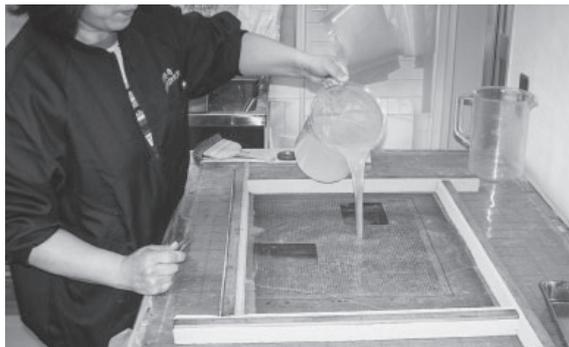
今回はやっぱり本業にからめて筆を進めるのが筋というモノで、虎と自筆資料と修復の接点を考えてみた。そうそう、以前に「虎」を含む腹稿を修復させていただいたので、その話にしよう（やってよかった）。

1990年代から始まった熊楠邸での資料調査会には比較的初期段階から参加させていただいたが、初めて腹稿をみたときの印象は強く残っている。通常、資料調査をしていると、新聞雑誌の切り抜き類はすでに劣化しているものが多い。腹稿類にも経年劣化は多くみられたが、それなりに気を付けて保管してきたのであろう触感があった。周囲の亀裂や折り畳まれていた折り目の擦り切れなどはみられたものの、それは何度も開いては折り畳んで使っていたと思われる「使用痕」であり、作成者（あるいは利用者）と資料の密接さをあらわす痕跡といえる。

この腹稿が書かれている用紙は、熊楠原稿の「鶏の話」が掲載された1909（明治42）年1月1日の新聞『海南時報』の校正用紙（片面だけ印刷されたもの）で、裏側の白紙面に細い墨書や朱筆で論考の推敲が図的に記されている。日本で国産の木材パルプの製造が開始されるのは1889（明治22）年で、1901（明治34）年には教科書用紙が和紙から洋紙へと切り替わった。この時期以降の新聞用紙は安価な「機械パルプ」という木材パルプを原料とした下級紙で、木材の不純物を多く含んでいる。その1つであるリグニンという木質の主成分は、紫外線があたると紙を茶変色させる原因となる。また、印刷インクがのりやすい状態にするためロジンサイズという滲み止めが添加されるが、その滲み止めの定着剤として加えられた硫酸バンドが、時期を経て「酸性劣化」という紙の硬化や亀裂、崩壊という症状をまねく要因となった。いわゆる世界的に近現代記録遺産の危機と警鐘されることになった酸性紙問題である。

けっして長期保存に適しているとはいえない新聞用紙ではあるが、熊楠にしてみれば思いのほか劣化が早く訪れることは知る由もなく、印刷用紙などで墨書でも滲まないし、たくさんもらったし、下書き的に使うには丁度よかったのであろう。彼がもし当時、下級紙の酸性劣化のことを知っていたら、他の保存性のよい紙に腹稿を記したであろうか。あるいは長く残す必要はない原案として、手近に大量にあった新聞用紙にやはり記したであろうか。何度も推敲しながら加筆するのであれば、思考を邪魔することのない早い筆さばきで書きやすいことも求められるし、自由に書き広げられるスペースも欲しい。和紙は滲み止めのドーサ引きがされているものは高価になるし、安い和紙では墨書は滲みやすい。なかなか望む大判の白紙用紙は見つからなかったかもしれない。なんてことを資料の修復をしながら妄想するわけである。

ちなみに、腹稿の修復には周囲の亀裂や欠損箇所に和紙繊維を補填し、糊を使わずに繊維同士の水素結合で強化する「澱嵌」という技法を適用させた。その後、強酸性の用紙にはアルカリ性剤を噴霧する脱酸（中和）処理を施し、延命処置を終えている。それでもや



腹稿の澱嵌作業（提供／元興寺文化財研究所）

はり定期健診は必要で、いずれ再び酸性化していく資料の再処理も将来的には想定しておく必要がある。

他にも保存の視点から懸念されるものは多くあるが、その1つは「ロンドン抜書」である。これはご存知のとおり熊楠のロンドン滞在中に記されたもので、52冊のハードカバー製本された厚手のノートに隔々までインク書きされている。熊楠のロンドン逗留は1892（明治25）～1900（明治33）年で、まだ酸性劣化や、鉄分を含んだ没食子インク（Iron gall ink）の腐食現象（ink corrosion）の劣化メカニズムが解明されていなかった時代である。まさか上質のノートに耐水性のあるインクで記したものが、複雑な化学反応を経て用紙ごと脆弱になってしまうとは想像していなかったであろう。せっかくマーブリング模様の素敵なお見返しの揃いのノートを入手して、研究に活かすべくたんまりと書き溜めたのに…と当人のかわりに残念がっている。

余談となるが、昨今、新しい記録材料が増えているが、何であれいずれは経年劣化していくものである。しかし「我こそは大物になるで」という方には、保存性のよい支持体と記録素材を選んでいただき、後世の修復家達になるべく苦労しないように心掛けていただきたいと願っている。

CONTENTS

第32回南方熊楠賞 受賞者決まる	…2
第13回南方熊楠ゼミナール基調講演 — 金文京	…3
パネルディスカッション — 金文京・小峯和明・菊地暁・田村義也・松居竜五	…10
講演 南方二書とレッドリスト — 土永知子	…19
講演 「南方二書」に出てくる藜類 — 土永浩史	…25
講演 「南方二書」と紀南の神社林 — 田村義也	…27
クマノチョウジゴケの補足 — 大和茂之・土永浩史	…31
講演 異孝之丞と横浜正金銀行の時代 — 異孝之	…33
講演 異孝之丞の家族史を映像化する — 小谷真理	…38
R・M・バックと南方熊楠の「光体験」 — 橋爪博幸	…42
「熊楠」生物覚え書 ③ — 土永知子	…47
南方熊楠研究における飯倉照平さんのお仕事 — 武内善信	…48
新発見 南方熊楠論考「粘菌の文獻」 志村真幸	…51
南方熊楠の菌類の学名について 大和茂之	…52
新資料紹介 杉山和也・志村真幸・岸本昌也・伊藤慎吾・土永知子	…56
南方熊楠と同級生たち 郷間秀夫	…62
書簡の杜（二十六） 岸本昌也	…64
書評・書籍紹介 大内規行	…66
南方熊楠研究会 年次大会開催について	…71